

令和5年度第2回 発達障害者地域支援協議会 議事要旨

【日時】令和6年1月22日（月）18:30～20:25

【場所】仙台市障害者総合支援センター研修室1

【出席者（五十音順）】（※欠席：植木田副会長，黒澤委員，今委員，米倉委員）

猪股委員，大塚委員，小島委員，小野寺委員，上西委員，癸生川委員，齋藤淳子委員，齋藤純子委員，佐藤幸男委員，平委員，武田委員，千葉委員，野口委員，堀越委員，谷津委員，佐々木委員（※作業部会より）

【事務局】

<健康福祉局>

障害福祉部 清水部長

障害企画課 小幡課長

障害者支援課 宍戸課長

北部発達相談支援センター 葛森所長，企画調整係 成見係長，乳幼児支援係 佐藤係長
学齢児支援係 綱島係長，成人支援係 原田係長

南部発達相談支援センター 大石所長，乳幼児支援係 畠山主幹兼係長，
成人支援係 後藤係長

<こども若者局>

こども家庭保健課 都丸課長

児童クラブ事業推進課 三井課長

運営支援課 加藤課長

<区保健福祉センター>

宮城野区家庭健康課 畑山課長，太白区障害高齢課 五十嵐課長

<教育局>

高校教育課 中村主幹，特別支援教育課 秋山課長

1. 開会

2. 会長挨拶

- ・野口会長より挨拶
- ・委員紹介，新委員挨拶（堀越委員）
- ・事務局については，机上の名簿を参照。
- ・当日は植木田副会長，黒澤委員，今委員，米倉委員が欠席。委員19名のうち過半数の委員が参加し，仙台市発達障害者支援地域協議会設置要綱第5条の規定に基づき，会議が成立していることを確認。
- ・議事録署名人として，小野寺委員が選出。

3. 議事

（1）作業部会の中間報告および「報告書（案）」について

野口会長	それでは議事1について，事務局から説明をお願いします。
事務局 （葛森所長）	今回は中間案として「資料1 報告書案」目次の「はじめに」から4章の途中までお示ししたが，今回は4章「具体的な取り組み」として先進地視察，5章「ありたい支援の姿」，6章「今後期待される取り組み」，「総括」を記載している。「資料2」に沿って概要を説明する。 令和3年度から作業部会を設置し，発達障害の特性があまり明確ではない方も含め，学齢期後半から青年期にかけてアーチルの相談件数が非常に増えている中，学齢期以降の成人期における課題を明らかにし，それぞれのライフステージを一貫した方の支援のあり方を考えることをテーマに検討を進めてきた。その中で「くらす・はたらく・たのしむ」三つの観点を

柱に、なかでも特に「たのしむ」を取り上げて、支援の視点について検討をした。アーチルの相談状況を踏まえつつ、作業部会委員の実践を見学・情報交換し、昨年度は東京都の「ら・るーと」「みつけばハウス」の視察をし、今年度は「くらす」を軸にPDDサポートセンターグリーンフォレストの視察を行った。

資料2のスライド6枚目では「成人期の自立において大切な視点」として4つ挙げている。一つは「安心できる人との関係を構築すること」あるいは「得意なところで自信が持つ・自分の役割を持つことで、安心できる関係を作っていくこと」。二つ目は「生活スキルを早い時期から培っていく」「友達と楽しく遊んだ体験や、心地良く居られる場所」等、生活の土台になるような基盤を作っていくことが大事だということである。三つ目には「情報を一元化して発信をしていく」「様々な支援をつないでいく『ハブ』のような機能が必要である」「多様な生き方や働き方を考えるロールモデルがあると良い」等、様々な情報へのアクセスのしやすさを挙げている。四つ目に「知識だけではなく、実際の成功体験を持つこと。たとえ失敗しても再挑戦するためのエネルギーになっていく」等、具体的な経験の積み重ねと振り返りが大事だと議論を重ねてきた。8枚目のスライドにある通り、「たのしむ」活動を通して「自分の居場所を見つけて社会参加への意欲や自己肯定感が得られ、何か新たなチャレンジをしていく原動力になっていくこと」、既に働いている人にとっても、働き続けるためのエネルギーとして「たのしむ」要素は重要な役割を果たすことも確認した。「たのしい」活動は、どのライフステージにおいても共通する縦軸となり、本人への支援の観点では、楽しい活動を通して居場所が保障され、自分を認めてくれる人と出会い、ピアとしての仲間関係が生まれ、新たなチャレンジへつながっていく起点となる。支援者の在り方としても、「たのしい」活動が多様な支援者・場につながる『ハブ』となる役割を果たし、そして支援者同士が繋がっていく仕組みの一助となっていくのではないかということを確認した。

これを図式化したものがスライド12枚目以降になる。スライド13枚目では、ピアの人達が集まる小さく閉じた空間の中で、ご本人が居心地の良さを感じ、自己肯定感を高め、エネルギーを貯めていきながら、今度はそこを拠点としてもう少し広がったネットワークにチャレンジをしていく…この時のネットワークはいわゆる福祉関係だけで閉じるものではなく、地域の中で幾層にも渡るネットワークが作られていくことが重要ではないかと議論してきた。そして、それは成人期から始まるのではなく、学齢期においても重要なことであることを再確認した。

今後期待される取り組みの一つは「たのしむ活動を軸にした発達障害児者支援体制の整備」として、楽しむ活動が人とつながるきっかけになるだけでなく、居場所の保障や仲間づくりの観点から成長発達につながる機会となり、そういう場所にアクセスできる仕組みを考えていく必要がある。また「支援者同士が繋がる仕組みづくり」として、一つの領域に閉じることなく広がっていくこと、楽しい活動を軸に『ハブ』となるようなところを考えていくということが大事である。報告は以上である。

野口会長

行政が主導して何かを行うということだけではなく、地域にある様々なリソースをいかに活用していくかということ、その中に障害のある人たちもそうでない人たちも一緒に入って色々な活動ができることが非常に大事になる。また、先程、情報へのアクセスに関する話もあったが、これも非常に大事な課題だ。

横浜でグループホームが地域住民の反対で建設を断念したという話があったが、そのような状況では困る。いかに「ダイバーシティ」「インクルージョン」を仙台市の皆さんにもどう理解いただくか、どう伝えていく

	<p>か、この辺りも並行して進めていく必要があると思う。</p> <p>本日、作業部会会長の植木田委員がご欠席のため、作業部会副部長である佐々木健太郎副部長より、今回の作業部会での協議や、報告書案の作成にあたって、特に重視した点や要点をご報告いただきたい。その後、作業部会にご参加の委員の皆様からも、ご発言いただきたい。</p> <p>では、佐々木副部長、お願いしたい。</p>
<p>佐々木作業部会副部長</p>	<p>第1回協議会以降の動きとして、横浜市のグリーンフォレストに視察をした。同行した齋藤敦子委員からも後ほどお話しいただきたいと思うが、一言で言うと『就労移行支援の生活版』という感じで、2年間期限つきで一人暮らしの体験をし、本当にその後、一人暮らしができるのか、グループホームを利用した方が良いかを見極めるというようなサポートをされていて、痒いところに手が届いているサービスだと感じた。</p> <p>今回まとめの作業をする際に「はたらく・くらす・たのしむ」3つの軸の「バランスを最終的にどうとるか」と考えた。しかし作業部会で一番盛り上がったところは、「たのしむ」という点で、ここが一番主張したいポイントにしようと、まとめた。資料2の11枚目のスライドの通り、要点としては「たのしいということは、どのライフステージにおいても、当事者に入って行くものだ」ということを再確認し、本人支援の4つの視点、支援者の在り方の2つの視点を提案させていただいた。</p> <p>第1回協議会后、加筆したのが資料2の14枚目のスライドの図になる。前回示した図には時間軸や「たのしみ・はたらく・くらす」の関係性が示し切れていなかったというところで、加筆した。「たのしむ」は、どのライフステージにおいても、支援の入口になるということ資料2の13枚目のスライドで示している。作業部会では「従来支援につながりづらかった、知的遅れの少ない青年期から成人期の発達障害の特性を持つ方々をどういうふうに拾い上げていくか、セーフティネットを張っていくか」というところで、まず「たのしむ」が入口として非常に有効ではないかというところは、前回同様、やはりどの世代においても色々な資源に接続していくきっかけになると、少し時間軸の広がりを持たせたところである。そこで拾い上げることができれば、楽しい活動に触れ、そして居場所や仲間ができて、そうしたポジティブな雰囲気の中で必要な体験、あるいは体験のし直しというところが、積み上げていけるのではないかと考えている。</p> <p>「成長発達に繋がる経験の機会」が、当然就労への意欲・維持・モチベーションっていうところにもつながり、これが生活経験として、それまで家庭の中だけではできなかった経験などを積むことによって「くらす」というところにも返っていくのではないかと。この「たのしむ」を起点にして「はたらく」「くらす」にも積極的にアプローチしていける可能性があるのではないかと。この際の支援者のあり方のポイントとして、いわゆる福祉関係者というネットワークに閉じないで、ローカルな意味での地域とのつながり、地域資源とのつながりを意識していくことにより、当事者は「たのしむ」を通じて、地域の中での居場所となっていくことが期待できるのではないかと。この「たのしむ」をきっかけにすると、どの世代でも入って来ることができる…各世代において資源を一覧できて、そこにアクセスできて、どの年代からでも学び直しのようなことができる仕組みを構築していくことが、必要ではないかと考えている。</p> <p>今後期待される取り組みについては資料2のスライド15の通りだが、今年度は作業部会があと1回残されているため、できたらその中で何か一つでも具体的な取り組みや何らかの動きを提案できたら、我々自身も楽しいなと感じている。</p> <p>資料2の16枚目のスライドにある「療育セミナー」については、昨年</p>

	<p>度視察した東京の施設の方に来ていただくことになっている。ここは本当に「たのしむ」に重点を置いていて、内容も含めて非常にインパクトある話が期待できると思う。「たのしい」ことから「はたらく」「くらす」が変わっていくと提案したい。</p>
野口会長	<p>それでは、作業部会にご参加の委員から、この作業部会に参加してお考えになったことや補足等、お話しいたきたい。上西委員、願います。</p>
上西委員	<p>作業部会参加し、東京へ視察に行かせていただいたのは、とても刺激になった。「みつけばハウス」も「ら・るーと」も、“遊ぶ”という色々な体験をすることに力を入れていた。東京では芸術家等、様々な文化人の方がいて、その方々を講師に迎えて体験をしてもらうことに振り切って、1か月に何回もイベントを企画し、その企画にも当事者の方が参加していて、その一連の活動を通じて「居場所」になっていく、そこからニーズがあれば他の施設につないでいく…、私自身遊ぶことが好きなので“こういう支援があつていい”と知ることができたのは、この作業部会に入らせていただいた私自身の収穫になり、“そういうことを色々な場所に提案してもいい”と、勇気を持つことができた。</p> <p>併せて、作業部会の中で色々な委員の方とディスカッションをすることは、とても楽しく、少人数で顔が見える関係の中で話が出来て、アイデアも生まれる場になって、やはりこういう場は大事だと感じる。今回「支援者に閉じないネットワークを作る」という内容が盛り込まれていたが、企業や力を持つ団体とつながっていったら、ディスカッションする場があると、福祉事業者だけでは限界だと思っているようなことが、他分野の専門家からすると別のアイデアが提案されたりして、コロンブスの卵的な展開も期待できそうな気がする。福祉関係者で閉じないネットワークが、次の課題になってくると思う。</p> <p>この作業部会で知り合った畔柳委員に誘われて、就労に関わる発達障害者支援のネットワークに私も参加させていただいているが、そこには企業の方や病院のケースワーカー等、色々な方が参加して月1回でディスカッションしたり、見学に行ったり、うちの高校にも見学に来てもらったりして、こういうネットワークに入るのも、協議会・作業部会に参加したメリットだと思っている。そういう所に少しずつ広がりが出てくると良い。</p>
野口会長	<p>この協議会の一つの目的というのは、少なくとも最低限ここにいる人たちがつながって、そのつながりを広げていくことがあるかと思う。是非、これからも色々とネットワークを広げていただければ大変ありがたい。では、猪股委員、願います。</p>
猪股委員	<p>保護者の立場として、作業部会の方に参加をさせていただいているが、やはり今回「たのしむ」にフォーカスできたところが、とても素敵だと思う。堅苦しくなく、やはり子育てにおいても純粋に「たのしむ」ことを忘れてはいけないところであり、私自身、楽しい気持ちで参加をさせていただいている。</p> <p>一方で「バランス」という点は先ほど少し話題に出ていたが、大変なことがある中で子どもと楽しむ時間も保ちつつ、生活の土台づくり、生活スキルのところや、障害特性に合わせて自立した生活がおくれるような、小さい頃からの関わり方はとても大事だと思う。また大きくなってから親と同居していたとしても、家庭の中で自立を、どう考えていくという視点も大事だ。</p> <p>「たのしむ」という視点で、地域における幼稚園・保育所・学校の先生方が、既にそれぞれ取り組んでいらっしゃることもたくさんあって、そこがさらに広がったと感じがして、嬉しく思う。</p>
野口会長	<p>こういう言い方は何だが、学校の先生は真面目な方が多い中、ある県の</p>

	<p>先生は“子どもに正しいことを教える”ことを実践されているお話を聞いたことがあった。学校内で対応の難しいお子さんがいた時に、毎回毎回子どもに“こうやって…”と教師が取り組む間に子どもはまた違うことをやってしまう。そうした時に「今度はそう来たか…だったらこうしよう…」と、子どもとの関係性というか、教師の捉え方というか、色々な関わりがある種、楽しみながら実践されている方がいて、そういう視点も大事だと感じる。</p> <p>では続いて、齋藤敦子委員、お願いする。</p>
齋藤敦子委員	<p>今回この作業部会に参加して、ネットワークの大切さを改めて感じている。「たのしむ」場の取り組みが既に展開されているなか、自分達なりに取り組んでいても、自分の所しか知らない状況だった。もっと自分達の取り組みをオープンにして他の人に知ってもらうことで、自分達の足りないことが分かったり、利用者の選択肢も広がることになると感じる。ネットワークという言葉は知っているつもりでも、自分達の取り組みをもっとオープンにしていかなければいけない等、この作業部会を通じて勉強になることがたくさんあった。「たのしむ」ことは、皆さんの表情が違うから、やはりそこを切り口にしたのはとても良かったと思う。</p> <p>「くらす」という点では、先日、横浜に視察に行かせていただいた。2年間、目的・目標を持って、生活上のことを経験的に学ぶ機会があることは、とても良い。約7割の方が最終的に一人暮らしされ、3割はグループホームや施設で生活していると伺ってきた。ご家族と「誰の何のためにやっている」という、今やっている取り組みの意味や意義を、支援者がきちんと説明し、本人・家族と共有して取り組まれていた。日々の支援において、ご家族と連携が難しい場合もあるものの、説明や対話をしながら家族と進めていくことは大事だと改めて感じた。また、私は昼休み中、職員が昼休み取るため、私が見回りをしている。そこで、使ったコップを洗ったり、ゴミの分別等、就労移行支援事業所ではあっても、利用者に対して生活上の事も声掛けをしている。視察先の生活面の支援は、とても勉強になった。</p>
野口会長	<p>またプラスしてお話しさせていただく。秋田大学や東北大学に赴任し、退官されたLD関係のご研究をされた川村秀忠先生という方がおられ、その川村先生が「障害のある子ども達は一人一人違い、一人一人に合った支援が必要ではある。でも、皆に共通している部分もある」と言い、それは何かと言えば「好きなことは皆、一生懸命やる」ということだった。私もその通りだと思っている。今回「たのしむ」ことにつながり、そこをベースにしながら、また色々なことにつながっていくという形ができると良いと思っている。仙台市で、それをドーンと表に出していけると本当に素晴らしいと思っている。</p> <p>では次に、齋藤純子委員、お願いする。</p>
齋藤純子委員	<p>作業部会の中身が濃く、その中で一番大事なのは「既存のネットワーク同士のつながりにおいて、福祉関係に閉じない」という点で、とても大きな一歩だ。私達は児童館という現場で、地域の中で生活をしている。ご本人もご家族の支援も、孤立させてはいけないと、福祉関係だけでなく、その地域の地縁の関係を大事にしている。これからどうやっていくかだが、ネットワークをつないでいくために交流会をやってはどうかと、作業部会の中で話題に挙がっていた。その交流会も、福祉関係者だけ・企業だけではなく、行政の担当課を超えて、皆でまず集まって顔を見合わせてやっていこうという意見が出ていた。またもう一点、インターネットやSNSを使った情報システムを早く構築して、情報を共有しながら楽しいことを選んでいける…今、何がやっているかが分かるようなシステムをつくれたら良</p>

	<p>い…という話題もあり、委員からアイデアがポンポンポンン出ている。交流会は、実現できそうな気がするので、是非、皆でやりたい。</p>
野口会長	<p>交流会は大事だと思う。それと発信という話題もあったが、SNSでは様々な情報が入ってきて、情報の管理ということも考えなくてはならない。また、もし仙台市がその情報ページを運営することになれば「仙台市のページに掲載されている情報は、仙台市のお墨付きがある」という受け止め方をされてしまうことにもつながりかねない。入ってくる情報データを一つ一つ全部チェックしていくことは作業的に難しく、この辺りの対応・対処の仕方を検討していかなければならない。そこに、専門の企業に入ってもらえると良いのかもしれない。</p> <p>ここまで作業部会の中間報告だったが、他の委員からご意見・ご質問があればご発言いただきたい。では、平委員お願いします。</p>
平委員	<p>私は、ここねっとで余暇活動の支援なども行っており、実践を踏まえて2点お話してお話させていただきたい。</p> <p>まず資料2の7ページのスライド13に「ピアとしての仲間関係の構築」「居場所（心理的拠点）の保障」とあるが、そのために「支援者は利用者の通訳になる」役割が非常に大切だと感じている。余暇活動の中で利用者の行動を見ていると、使う道具を他の方に渡してくれたり、やり方を説明してくれたり、優しい言動でも、どうしても誤解されやすい言動で現れてしまう方がいる。例えば「黙って渡してしまう」とか「言い方がどうしてもきつくなってしまう」「話した内容が誤解されやすい」等で、支援者は、そういった方々が余暇活動で、うまくやっていけるように、その人の気持ちを他の人に代弁する重要な役割があると感じている。</p> <p>もう一点は、同じスライドに「その場所からさらに外へ」とあるが、私自身もそうだが、発達障害のある人同士だと安心して活動ができるが、その外へとなると、対人不安が強くなったりして、そこになかなか踏み出せないし、そのモデルも少ない。私はベースの楽器をしているが、ジャズフェスティバルにチャレンジしようというセミナーがあって、そこで私自身がマジョリティの方と関わる機会になった。自分がそういった方々のモデルになれば良いなど、今年チャレンジしてみたいと考えている。</p>
野口会長	<p>「通訳」は非常に大事な点で、ご本人としては発した言葉と違った意味合いで使っていて、相手からすれば驚かれるような言葉だったりすることもある。そのあたりを間に入って橋渡しをしていくことは非常に大事だと思う。</p> <p>また障害のない方には十分通じるであろうという言葉が、実は伝わりにくいこともある。「分かって当然」というつもりで話すのではなく、少し噛み砕いたり、言い方を変えて伝えていくことも必要になる。例えば、サッカーで「あがれ」「戻れ」「開け」という言葉を普通に使っていたが、知的障害のある方とサッカーをする場面で、何か上手くいかないことがあった。「上がれ」の意味が実は分からなかったようで、「上がれ」は自分側から相手のゴールに向かうことで、「開け」は中心からサイド方向に動くことを言い、この点を改めて一つ一つ伝えていくことが必要だった。ことわざや隠喩が伝わりにくい等、こういった点の「通訳」は必要かもしれない。</p> <p>では、佐藤委員お願いします。</p>
佐藤委員	<p>資料1「報告書」の27ページ、資料2のスライド13の図が、白黒で印刷されてしまうと当事者と支援者の判別がつきにくい。おそらくカラー印刷で図を作成されているかと思うが、予算的に白黒印刷になることも想定すると、人の図に帽子を被せてみる等、キャラクターを一目見て分かるような工夫が必要かと思う。</p>

事務局 (成見係長)	グレーでも濃淡つける等、佐々木副部会長とご相談しながら、一目見て当事者と支援者が分かるように修正したい。
野口会長	では、今年度初参加になる堀越委員、ご意見を願います。
堀越委員	<p>教育分野にいと、なかなかこういう場はなく、教育に閉じた形での議論になっていくことが多く、非常に参考になる。</p> <p>今回「たのしむ」がキーワードとして挙がっていたが、折立地区の市民センターで主催しているイベントの中に「Z世代プロジェクト」として、折立中学校の生徒が30名ほど、企画委員として自主的に参加している。夏祭りや、節分の豆まき、冬は「ライトアート in 折立」と言って公園をライトアップする企画を立てて、小さい子供たちも呼んでイベントを開催している。その中には何人か、発達障害の特性を持つ子どもたちも入っていて、企画会議は少し苦手でも、参加者に配布するしおりに抽選券を閉じこむ作業を綺麗に正確に担ってくれる子がいて、職員も頼りにして、結構楽しそうに過ごしていた。そこで地域の方や小さい子から“ありがとう”と言われたりして、い、「たのしむ」ことが子ども達のベースというか、生活の潤いになっていて、かなり発達特性がハッキリしている子でも不登校にならず、通常学級で過ごしていたことを思い出した。</p> <p>私が教員をやっていた時代の話だが、発達障害のある子で車が大好きで「車を洗わせてほしい」と言ってくる。教員は少し不安を抱きつつも思い切って洗ってもらったら、車に傷がいつぱいついてしまったけれども、本人は満足していた。その子は今、成人になって清掃の仕事をしているが、特別支援学校の高等部でガソリンスタンドに実習をし、そこで褒められて、卒業後は自動車免許を取って近場にドライブしに行っている。つまり、好きなことはやっぱり好きで、今でもその時のことを「すごく楽しかった」と話していて、勉強のことは全然覚えていなくても、楽しかった経験はしっかり覚えている。そう考えると、この協議会の「たのしい」が軸になるというのは、年齢期ではまさにその通りだと思う。しかし、学校の教員になると、「たのしむ」と「はたらく」…学校では「学ぶ」なるが、どうしても先生方の義務感によるのか、どうしても「学ぶ」に特化してくることがある。現場で子ども達と向き合ってる若い教員が、こういう話と触れ合うような機会があると良くて、青年期に必要な大切なこと、こういう視点を教育職員で共有していく機会を、我々管理職が作っていく役割があるのかもしれないと思って聞いていた。</p> <p>最後に一つ。先ほど話した「車好きの子」が「あの時、忘れられない授業があった」と話していた。その子は小鳥が好きで、当時教員をしていた私は、小鳥が教室に舞い込んできた時に“雛鳥を親鳥に返そう”という授業を1日かけて行った。そうしたら、見事親鳥の元に返って行って…その時のことを鮮明に覚えていて話してくれた。発達障害があってもなくても、「たのしい」経験はその後の糧になっていくし、エネルギーにもなると思う。「たのしい」を全面に出すことには賛成だ。</p>
野口会長	<p>学校の中でも、学びのところにいかにかこう「たのしさ」を入れ込めるかも大事なことだと思う。大学においても、学生は1年経つと講義の内容は全然覚えていなくても、雑談の部分だけは覚えているということもある。</p> <p>そろそろ一つ目の議題を終わりにしたいと思う。報告書の最終版の完成までのスケジュールを事務局から説明いただきたい。</p>
事務局 (成見係長)	今回お示した「報告書案」については、本日いただいたご意見等も踏まえて、年度内に校正を終えて完成させ、委員の皆様をはじめ関係機関の支援者の方々にもご覧いただけるようにしたいと考えている。今後の校正等については、野口会長、植木田副会長、佐々木副部会長にご相談しながら進めていきたいと考えている。

野口会長	<p>「報告書」の校正について、委員の皆様から特にご意見がないようなので、そのような形で進めていきたいと思う。その他の意見として、谷津委員、願います。</p>
谷津委員	<p>私自身、この「たのしむ」の方向性には大賛成だが、いくつか意見をお話させていただきたい。</p> <p>まず、年齢が小さいほど自分から情報にアクセスすることは難しく、そうすると保護者とその情報を子どもに伝えることになる。そうすると保護者の価値観に大きく左右されることもあり、楽しいことを企画しても、保護者が「必要性がない」と捉えれば、子どもに情報提供はしないだろうし、子どもが参加する機会も積み重なっていかない。そう考えると、やはり家族支援がとても大事であり、今回の報告では家族支援の部分があまり出てきていない。委員からも家族支援の話題が出ていたことから、柱として「支援者のあり方」だけではなく、家族支援についても「『たのしむ』は必要だ」と思えるような内容で触れておいてほしい。年齢が小さいと“療育”や“勉強”等、保護者は子供の成長を願って希望する。「楽しむことは必要だ」「楽しんで良いんだ」と保護者が捉えられるように支援者がサポートしていくことも必要だし、保護者自身も楽しめるような仕掛けを入れていかないと、楽しい体験は積み重なっていかないと思う。</p> <p>また楽しい企画が無料だと良いが、子どもの貧困問題が取り上げられている中で、有料の企画になると、お金がある人しか参加できないことになる。どんな家庭に生まれても、同じように機会を保障されることはやはりベースとしてとても大事だと思う。「保護者が車を持っていないからイベントに連れて行けない」とか「保護者が同行できないから子どもも参加できない」という選択をせざるを得ないのは、子どもにとっても不利益になる。子どもも保護者も参加したいときに、きちんとアクセスできるよう保障してあげたい。</p> <p>最後になるが、発達障害のある方の中には真面目な方も沢山おられ、「たのしむ」と出てしまうと、「楽しまなくてはならない」と捉えてしまい、仕事が終わった後や週末に沢山予定を入れてしまって、楽しむどころか「やらねばならぬ」状況になって、疲れてイライラして仕事も休んでしまうようなことになっては本末転倒だ。そう考えると、「たのしむ」は余暇の表現の一つだと思うが、私は余暇の過ごしの中に「一人で過ごす余暇」「仲間と過ごす余暇」「休む余暇」のバランスが大事だと思う。毎週のように“どこかに行かなくてはならない”ことは全くなく、元氣良く働くために、自分らしくいられるために、「休む」ことも必要であり、どう「休む」かを小さい頃から学んでいくことは、とても大事だと思っている。このような点も報告書に記載してほしい。</p>
野口会長	<p>非常に大事な視点である。ダラダラするとか、ポーっとするとか。家族支援も、とても大事な視点だ。</p> <p>具体的なことを考えると、沢山の課題があり、実務的な点では大変さがあるかもしれないが、福祉に限らず企業等からも手伝っていただくことも考えていくことも一つのやり方だと思う。</p>

(2) 意見交換

野口会長	<p>本協議会では、令和3年度から3年間「成人期の自立を実現するために必要な支援やネットワークのあり方について」をテーマに、作業部会を設置して検討を重ね、報告書にまとめて一区切りとなる。次年度以降は、これまでの協議や最近の発達障害分野における課題等も踏まえて、新たなテーマを設定し、引き続き発達障害児者の支援体制整備について検討してい</p>
------	---

	<p>きたい。</p> <p>次年度以降の協議の参考にするため、委員の皆様から日頃感じていることや、今後特に取り組むべき課題、本協議会にご参加いただいた感想等、ご意見をいただきたい。まだ発言されていない委員を優先して、まずは大塚委員お願いしたい。</p>
大塚委員	<p>私が診ている 20 歳前後の方々は、「社会とのつながり」や「親離れ」がテーマになる。家族支援はもちろん大事で、ベースになるが、当事者の活動の場・受け皿となる教育機関や就労先の理解をもっと進めていく必要があると感じている。研修会等を通じて“言葉では知っている・頭では分かっている”のかもしれないが、支援の柔軟性も含めて課題を感じる。その解決方法は社会を変えることに近く、なかなか難しい。啓発活動や、数値目標を出して取り組む等、方法は色々あるかもしれないが、ご本人の活動の場・受け皿になる機関へのアプローチをもう少し考えていく必要があると思う。発達障害児者への支援は、個別性も高い中で色々取り組まれているが、もう少し社会の方にアプローチしていかないと、この問題はいつになっても変わらないのではないかなと思う。</p> <p>もう一点、「将来、自立するためにどうしたら良いか」と保護者はとても不安を抱いている。ひきこもりの方への対応も増えている中、結局グループホームや障害者施設に入所するのは「保護者が倒れてしまった」等の事態が起こらないと先に進まないのが現実だ。保護者が何年も将来の生活について相談し続けてきても、ご本人がスムーズにグループホームや施設入所しているケースは少なく、皆、何かしら事件や問題が発生して入所しているのが現実だ。そういう生活面の支援についても、もう少し取り上げてほしい。</p>
野口会長	では、次に小島委員、願います。
小島委員	<p>発達に課題のある子ども達が進学する際、特別支援学級に在籍するのか、通常学級か、特別支援学校かを、短い期間で結論を出さねばならない。情報が少ない中では保護者は結論を出すことが難しく、アチルの相談で「特別支援学級が良いのではないかと」言われても、保護者はそこから「先生、どうしたら良いのだろう」と悩み始める。先程の議論で「情報」が挙がっていた通り、「たのしむ」や「生活」に関する情報は光になると思う。</p> <p>また、先程の大塚委員のご発言を聞いて思い出したのだが、小学校に進学した子どもにちょっと問題があると、進学先の小学校から「特別支援学級に移ってください」と保護者が言われたり、小学校から園に電話がかかってきて「特別支援学級を勧めようと思っているのですが、あの子は、どんな子どもでしたか？」と聞かれたことがあった。その子どもにとって本当に必要なら特別支援学級への移籍も必要だと思うが、これはいったいどういうことなのだろう。また、学校に勧められた通り特別支援学級に進むと、保護者は「このまま特別支援学級から出られなくなる」「高校に進学ができない」という不安も当然湧いてくる。発達障害に関する情報が増えている中で、長いスパンでの情報は、小学校の先生方には少ないのかもしれない。そんななか、私自身、何をしたら良いか、何ができるかと考えて、卒園児の保護者も含めて、毎月 1 回、保護者会を企画している。</p>
野口会長	では次に、小野寺委員、願います。
小野寺委員	<p>私が所属している児童発達支援センターは、乳幼児期は保護者支援を一番大事にしており、資料 2 のスライド 11 枚目「本人への支援」の 4 点は、児童発達支援センターの中では対象が家族であり、さらに工夫が必要と思う。この協議会に参加させていただき、上西委員や大塚委員に OB 保護者や職員に青年期のお話をいただく機会が得られ、青年期をイメージす</p>

	<p>るような保護者支援につながった。今後は「たのしむ」にフォーカスを当てて、穏やかな青年期を迎えるために我々ができることは何で、ということなのか、また深く考えていかなければならないと思っている。</p> <p>乳幼児期に関わる我々の課題は幾つもある。どんなタイプのお子さんであっても、保護者が「就労したい」と言った時に支援するにはどうしたら良いか…。今、幼稚園や保育園に支援者として関わる中で、お子さんのことを十分に理解していただくことは難しいと感じている。大塚委員のお話の通り「啓発」という部分では、我々児童発達支援センターももう少し頑張らないといけないところだが、担任の先生とだけ話し合うのでは、園の考え方に踏み込んでいく所までは辿り着かず、難しさを感じている。児童発達支援センターから次の幼稚園・保育園と進む時に、子どもや家族のニーズにしっかりとこたえられる地域の中で安心して育てていくという点では、まだまだ支援が不足していると感じている。この辺りについて、啓発活動をしていくかとか、「たのしむ」ことが本当に大事だという辺りを皆様と協議できたら良いと思っている。</p>
野口会長	では次に、癸生川委員お願いする。
癸生川委員	<p>先程堀越委員がお話しされたように、学校教育では、どうしても「たのしむ」が、あまり取り上げられてこなかったと思う。私がいる特別支援学校は、「はたらく」と「くらす」に関して非常に力を入れて指導しているが、やはり「たのしむ」という視点は欠けているのではないかと常々感じていた。</p> <p>何年か前に、情緒障害に関する全国大会を仙台で行ったが、その時に余暇がテーマになって、色々な先生方にお話しいただいた。やはり、子ども時代から青年期の余暇をどのように過ごすか、それがどう生活を充実させることにつながるかは、学校時代にどんなことを経験させるか、どんなことに触れていくかも大事ではないかと思っている。「働く」ことの対極が「遊ぶ」ではなくて、両者とも大事な要素であり、余暇や「楽しむ」ことの重要性を理解して取り組んでいけるよう、今後力を入れていきたいと考えている。</p> <p>話は変わり、この頃、私が思っていることなのだが、最近、テレビや映画で障害を持った方のことが取り上げられる機会が増えている。聴覚障害、視覚障害、精神障害もそうだし、自閉スペクトラム障害をモチーフにしたドラマもあると聞いている。世の中で障害に関する関心が広まってきていることはとても喜ばしいことだが、これが正しい理解につながり、当事者の方が生きやすい支援につながっていけば良いと感じている。</p>
野口会長	では続けて、武田委員お願いする。
武田委員	<p>弁護士として協議会に参加させていただき、“どんな所でお役に立てるのか”と、いつも考えながら、皆様のお話を伺っている。我々弁護士は、“特定の分野に特化した業務”というよりは、広く、皆様のお悩みや困り事があった時に、解決に導く手助けをする仕事をさせていただいている。</p> <p>「はたらく」では労働問題、「くらす」では買い物や金銭管理等でつまづいてしまうこともある。「たのしむ」では、オンラインゲームで相手の顔が見えない中でつながってトラブルが生じたり、学校内の児童生徒同士のトラブル等、そのような事態になった時に当事者・ご家族、あるいは支援者の方の「どなたからでも相談しやすい窓口」として弁護士相談の門戸が開放されている。しかし、なかなか皆様に伝わってなくて、まだハードルが高いのかもしれない。このような会議等で、つながりを作っていくながら、気軽に相談できるような関係を築いていくことが、重要だと考えている。ご家族が弁護士に相談することは心理的なハードルも高いと思う。そこで、支援者の方が「そんなに身構えずに相談しても大丈夫だよ」と一</p>

	<p>言言っていたただけで、ご家族の方も安心すると思う。そんな利用もできるということを、まずは皆様に知っていただきたいし、一人の弁護士としても、弁護士会としてもこの点が課題だと思いつつ、皆様の意見を伺っていた。</p>
野口会長	<p>では、千葉委員お願いします。</p>
千葉委員	<p>保育所でお子さんとうどう関わっていくかを考える時に、「たのしむ」というところでは、まず好きな遊びを見つける。重い障害があって言葉で話すことが難しいお子さんであれば、どんな場所が好きなのか、あるいは、どんな感触が好きなのか、どういう声のかけ方をしたら安心するのか等、一つ一つ探りながら、お子さん達と関わっている。</p> <p>先程、意見に出ているが「助けて」と言えることは大事だと思う。児童発達支援センターを経ず、保育所に直接入所してきたお子は、初めての集団の場になる。伝えたいことがあっても、言葉で伝えることが難しい時に、大きな声を出したり、物を投げたりする要求の出し方ではなく、食べたくない物が載ったお皿を子どもが保育士の前に差し出す等、子どもが出した要求を大人に受け入れてもらう、その体験の積み重ねが、その後の力になっていく常々思っている。私達が乳幼児期に大事にしていきたいことが、きっと次のところにつながっていくと思つて、今後も取り組んでいきたい。しかし、沢山のお子さんをお預かりする中で、子どもが出したちよつとしたサインをキャッチしきれないこともあり、より丁寧な保育とは思つていても、やはり難しい場面もあるのが実情だ。</p> <p>また、先程、家族支援が話題に挙がっていたが、自分から情報をどんどん仕入れてくる保護者もいれば、数は少ないが、携帯電話を持っていないご家庭もあり、家庭環境は様々である。様々な背景を持つご家庭に対する支援も大事であり、“これまで我々が大事にしている方向性は良いんだ”と、皆様のお話を聞いて感じた。</p>
野口会長	<p>その他、ご意見のある委員はいるだろうか。</p> <p>では、上西委員、お願いします。</p>
上西委員	<p>先程、大塚委員から「企業側の受け皿」が話題に挙がった。私が先程お話ししたネットワークの中で、企業の採用担当者や障害者就労支援担当者は「企業側は障害のある方にどう対応して良いかのノウハウがないのでは是非教えてほしい。教えてくれれば、企業側は多分受け入れられる」と話していた。おそらく企業側が二の足を踏んでいるわけではなく、その出会いがなかなか作れなかったのではないかと考えると、企業の採用担当者や、障害者就労支援担当者へのアプローチは大事になってくるのではないかと思う。</p>
野口会長	<p>他にいかがか。では大塚委員、お願いします。</p>
大塚委員	<p>自分の反省も含め、皆様にも是非考えていただきたいので、お話をさせていただきます。</p> <p>先日、私が担当していた患者さんが利用を開始したグループホームに訪問してきたが、グループホームの支援者は上手に対応して下さっていて、私から「どうして上手くいっているのか?」「どんな研修を受けているのか?」「どんなマニュアルがあるのか?」と聞いてみた。グループホームの支援者は「そういう物はない」「この利用者さんは、こういう方だから、こういう風に対応した方が上手くいく」と、試行錯誤してやっている」と言っていた。私も研修会の講師として「自閉症とは…」「障害特性に合わせて、こうやったら良い」等、マニュアル的なことを一生懸命話してきたが、それが逆に、現場で支援している方の思考を固めているような気がした。知識は大事であり、ベースとしては知っていかなければならないと思うが、何かそれに当てはめようとして、結局支援が上手くいって</p>

	ない、あるいは障害のある方を排除する方向に向かっているのではなからうかと、危惧している。私自身のことを振り返って、少し考えなくてはいけないと思うし、皆様も色々な方に情報を伝える機会があると思うので、お伝えさせていただいた。
野口会長	他にいかがか。では、谷津委員お願いします。
谷津委員	今年の元日の能登半島の大地震では、とても心が痛く、ニュースを見ながら「もし今、同じような地震が起こったら、今、関わっている子ども達を守れるだろうか」と思った。東日本大震災から12年が経ち、あの時、あれだけ心に誓って、啓発活動も含めて、保護者と一緒に取り組んだりしてきたけれども、あのニュースを見て、凄く自信が持てなかった。震災を知らない子ども達は12歳になっており、この機会に改めて、障害のある方、どこにつながってない方も含めて、その方達を一人も取り残さないでいくためにはどうしたらいいのかを、こういう部会で話をしても良いのではないかと思う。
野口会長	では他に、佐藤委員、お願いします。
佐藤委員	企業という話が出たので一言、お話をさせていただきたい。 「ご本人から」自分に障害がある「とは聞かないが、どうも最近見聞きする発達障害の特徴と重なるのではないかと感じられ、どうしたら良いか」と、企業から問い合わせが、よく入ってくる。ご本人自身が自分に障害があることを認めていないため、こちらとしても一般的なお話をさせていただくが、企業側は「一旦採用した以上、自分達でもきちんとやっていきたい」という思いもあるし、障害者雇用であれば、事前にどういう障害の方が来るのかと支援機関の方を巻き込む等、一生懸命努力されている所もある。法定雇用率を満たすために採用する企業は確かにあるかもしれないが、なかには「せっかく採用したのだから簡単に辞めないで。一度辞めてしまったら、また1からやり直さなければいけない」と考える企業もある。企業側も四苦八苦されているという実情であり、何とか考えていきたいと思っている。
野口会長	色々と沢山のお話をいただくことができた。この内容を参考しながら、来年度の方向性について検討していきたい。またテーマ以外のことについても、必要なことは協議会の中で議論していきたい。 次年度以降も、よろしくお願いします。 それでは、議事としては以上とする。

4. その他

(1) 委員から補足や情報提供等、なし。

(2) 事務局より

- ・令和5年度アーチル療育セミナーを3月5日福祉プラザにて開催する。昨年度、作業部会委員と視察した「みつけばハウス」の尾崎ミオ代表を講師にお招きし、「たのしい」活動から始まる地域に根差し、将来を見据えた発達障害児者の支援と題して、作業部会委員の実践報告を交えながらパネルディスカッションを予定している。
- ・本日の議事に関し、追加のご意見がある場合は1月29日(月)まで、事務局宛てにメール・FAX等でお知らせいただきたい。また議事録は事務局で案を作成の上、委員の皆様へ送付させていただく。

令和6年3月16日

署名委員：

小野寺信子

